一度死んだヤツと二度生きたヤツ

闇木諒諧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一度死んだヤツと二度生きたヤツ

【Ｎコード】
Ｎ０７５１Ｎ

【作者名】
闇木諒諧

【あらすじ】
６月５日午後４時３分１３秒、主人公波沢進太は３人の人間を殺めた。
その末に自ら命を絶った。そのハズなのに、まるで生きているかのような自分の体。そして目の前にいた青年、ホープ・ディスライクに自分の肉体が既に無い事を告げられ愕然とする。その後、彼からある人物の捜索・捕獲を依頼されるが・・・。

記録1　自ら命を絶ったヤツ

人は脆い、人は弱い、人は小さい、人は危うい。そんな言葉をボクはこの時、脳に銃弾をぶちこまれるくらい痛感した。

「やめてよっ・・・！アンタとアタシは別れたでしょ、帰ってよ！」

「黙れ、別の男ができたって言ってフラれて、どんな男か来てみればば・・・・。よりによって、高貴(こうき)だったなんてな。ボクはプロのクラウン顔負けのピエロだったというワケか・・・・。」

気が付くとボクは、友人である高貴の心臓にナイフを突き刺していた。高貴は、即死だ。

「さて、残るはオマエだ。全身八つ裂きにして、悲鳴をあげさせて首を切り落とそうかな。」

「やめてぇぇぇぇ！」「うぁあ・・！」「ぐぉえあ！」「あぁ・・。」・・・・

ボクはさっき言ったとおり、八つ裂きにした元カノ瑞穂(みずほ)の首をざくりと切り落とした。

「ふふ、日本はバカの国だから殺しをしたって捕まらないな。」

部屋を後にしようとした時、ドアを開けるとそこには隣のおじさんがいた。ボクが何をしていたのか、おじさんに一瞬で見抜かれてしまう。

「まっ、まさかっ！」

「どけぇえ！！」

ボクは無我夢中でその場を走り去った。おじさんの脳天にナイフを刺したまま・・・。これでボクは、三人の人を白昼に殺めた凶悪犯に成り下がったというワケだ。当然、警察の捜査でボクが犯人だって事はバレている。捕まれば、最低終身刑に違いない。約半日の逃亡の末、ボクは栗山第一倉庫に追い詰められた。

「観念しろ、波沢進太(なみさわしんた)！」

逃げる、時効になるまで永遠に逃げ続ける！牢屋に入るなんてまっ

ぴらだ！そんなことをボクはずっと思っていた。
カラン―
何か足に当たった。この音は木材か・・・？見てみると、木の棒が転がっている。先端は鋭利に尖って武器になりそうな代物だ。けど、ボクはただの高校２年生。まともに闘りあえば一瞬で終わってしまうだろう。そこである方法を思いついた。
「・・・。ぐぅうっ！」
「なっ・・・！」
ボクが思いついたのは、自ら命を絶つ事である。どうせ殺人犯のレッテルは消える事はないし、将来も苦悩と絶望しかない。それならいっそ死のうと思い立ったのだ。そして、６月６日午前２時４分６秒にボク波沢進太は死亡した。
「おーい、生きてらっしゃいますか～？って、半分死んでるようなものですが。」
何だろう、人の声が聞こえる。ボクは自分の心臓に木の棒を刺して死んだハズ。否、確かに自殺した！死んで五感が残っているなんて有りえない！でも、聞こえる・・・。
「うわあっ！」
目が見える、喋っている、体が動いている。これはもう、生きているとしか思えない。周りを見ると、目の前に一人の青年が立っていた。
「お気づきになられましたね。ここがどこだか、おわかりですか？」
「えっ・・・？アナタは？」
「ワタシはホープ・ディスライク。波沢様、アナタが今どのような状態かをお教えしましょう。」
ホープと名乗る青年は、ボクが今どんな状態かを語った。
「アナタは確かに、あの夜に自ら命を絶ちました。ですが、精神は死んでいません。肉体は、アナタが死んだ２日後に火葬されて骨になりました。もうアナタが帰る肉体はありません。」
「そんな・・・！これは、ボクの精神（こころ）だって言うんですか！？」

ボクはその事実に愕然とした。肉体はもう骨だなんて信じたくない！しかし、冷静になって考えてみると死んだのが夜だと明後日に葬式だと簡単に計算ができた。

「波沢様、もしその罪がなかったことになって生き返ることが出来るとしたらどうします？」

「えっ、そんな事が・・・・。」

ホープさんはボクの手を握り、強引に地下へ連れて行かれた。

記録１　自ら命を絶ったヤツ（後書き）

今、ポケモンの小説を連載していますが若干手詰まりなので、この小説を新たに連載しました。つまらないモノですが読んでください！

記録2　自分の欲に忠実なヤツ

ホープが連れて行った地下室には、巨大な機械があった。これは何の装置だろう？

「ははは、どうです？ワタシが発明した、霊魂完生装置！これを使えば、死人は新たな命を得られるうえ今までの罪がすべて消えるのです！新たな存在になるのですから！！」

「すっげ・・・。」

ホープはこの装置の使い方の説明をした。

「使い方は簡単です！この3つのボタンを左から順に押すだけ！と言いたいのですが、起動するためのアイテムが前にここに来た人間に奪われてしまったのです・・・。」

うぅ、こりゃその人探せってパターン入ったな～。装置を見ると、1つパーツが足りないのがわかる。

「名前は三国咲羅、歳は17、アナタと同じ純血の日本人です。」日本人、しかも17歳なんてボクとかなりかぶってる。もしかして、死因も・・・。

「その人間は、2週間前にここを訪れました。死因は事故死、大型トラックにひき逃げされてしまったそうです。祖母の誕生日祝いに行く途中と言っていました。」

「そう・・ですか。ボクとは違いますね。人を殺めた挙句に自殺したボクとは・・・。」

そう、あの日ボクは三人の人を殺めた挙句に罪から逃れたいがために、自殺したんだ。残された家族の悲しみなんて、これっぽっちも考えないで。

「しかも、その人間は地獄で作られた武器、殺血巌を生まれながらに持っていた。

そんな人間にワタシが敵うわけなかった・・・。」

ホープはその場で肩をガクリと下げた。よほどパーツを奪われたの

がショックなのか・・・。
「わかりましたよ、その人からパーツ獲り返してきます！」
「ほ、本当ですか！では・・・。」
ホープはポケットから鍵らしき物体を取り出し、ボクに渡した。
「これはこの世に通じる鍵です。時計回りに6回回せば、アナタ死んだ所へ戻れます。ただし、幽霊としてですが。それでもよろしいですか？」
そんなことはどうでもいい！ボクは生き返って、2度目の人生を薔薇色に飾るんだ！
「じゃあ、行ってきます！」
ボクは鍵を6回回して、あの場所へ戻った。罪を犯したあの場所へ。
「もうサッパリしてるな。あ、三国って人探さなきゃ！」
ボクは外へ勢いよく飛び出し、なんと空を走っていた。
「ふっふ～、さすが幽霊！浮いてるぞ～！」
しばらく空を走る余興を楽しみ、そして地上に降りた。
「しかし、幽霊ってことは人に見えないってワケだよな。・・・ん！？」
ボクはここで真逆のことを考える。
「なら、幽霊は幽霊が見えるのか！それなら話は早い！」
ボクは世間の3割強の人に失礼と思いつつ、存在が幽霊っぽい人を探した。
「あのボウズ！幽霊かも！って、咲羅って女じゃん・・・。」
いや、名前が女だからって女とは限らない。男の可能性だって十二分にある。ボクはひたすら、画家や配達員や海を窓から眺めている人・・・。見つからない、というかみんな平然と生きてるし！
「あの、何してんですか？」
「えっ、まさか・・・。」
振り向くといい感じのルックスの、年頃って女の子がいる。この子が咲羅、ボクが求める第二の人生を邪魔する敵！
「キミの持ってるパーツ、力ずくで貰い受ける！！」

「パ、パーツって何！？」

ボクは何も考えずに、彼女に飛び掛った。彼女の持つ、地獄の武器の恐ろしさも知らずに・・・。

記録２　自分の欲に忠実なヤツ（後書き）

今回からこの後書きを、「地獄の豆知識」ってコーナーの場所にしまーすｗｗｗ

記念すべき第一回目は、地獄の十王の一人「閻魔王」についての豆知識！

地獄の十王であまりに有名な王ですが、日本ではその正体はお地蔵様、正確には地蔵菩薩であると言われています。インドではこの世で一番最初に死んだ人間、ヤマだと言われます。地獄の七回の裁判のうち、三十五日目の裁判を担当しています。

生前に悪い事してたら、舌抜かれちゃいますよ～。

記録3　地獄の武器を持ってるヤツ

ボクはこれ程まで、自分の命に執着した経験はない。自分の命の為なら、何度でも他人を殺れる。これじゃ、人というより悪魔だな。

「もう一度死ね！三国咲羅ァァ！！」

「きゃあっ！・・・何でそれを知ってるの！？ワタシが一度死んだこと・・・！」

一度死んだって自白した！この女が三国咲羅、人でありながら二度人生を味わったヤツだ！

「自分だけ、自分だけ！二度も生きるなんて、他の死んでしまった人達に申し訳ないと思うだろう！」

「じゃあ、キミにとってワタシは悪魔ってこと？ならキミは自分が正しい人だったと本気で言えるのかな？言えないよね、そうやって自分の命に執着してんだもん。」

この女、人の後悔ってキズを抉りに抉りやがる・・・。駄目だ駄目だ、落ち着かないとこの女のペースになって逃げられる・・・。

「女に男が負けちゃ話になんないよ！」

「ナメないでよ、これでも空手黒帯なんだから！」

ボクの全力のパンチが、アッサリ避けられた。そして避ける間もなく、カウンターが入った。

「ぶおぉ！」

ボクは１０メートル先までぶっ飛ばされた。１０メートル人を殴り飛ばすなんて、人じゃない！これは女の力じゃない、地獄の武器の力だ！

「地獄の武器のハンデなんて無いも同然さ！三鷹の乱闘王、波沢進太の腕力を見ろ！」

そう、ボクが生きていた時のふたつ名は三鷹の乱闘王。三鷹ではスポーツの試合が行われない。それはボクが難癖をつけて、乱闘を始めて試合を中止させていたからだ。その腕力で女子には注目されて

いたが、スポーツをしているヤツらにはさぞかし邪魔者だったことだろう。
「はあぁぁっ！」
「やっべ、でも受け止めれるレベルだ！」
ボクはあえて攻撃を避けなかった。女が地獄の武器をつけていなかったからだ。さっきまでつけていたのに、なんで外したんだ？もしかして、地獄の力を使いこなせていないのか？
「チャンスだ、喰らえ！」
「回し蹴りぃぃ！」
今度は２０メートル近くぶっ飛ばされた。地獄の武器がまた発動してる。防衛本能ってヤツか？
「くっそ、また発動しやがって！コントロールできないのか、それ！」
「知らないよ、気付いたら勝手についてるの！」
冷静に考えるんだ、波沢。女を殺る方法は１つだけだろ。女が突っ込んでくる時に、カウンター１発をダイレクトに心臓に決める！それしかない！
「どしたぁ！生きたいんだろ、その為にはここにいるボクを倒さなきゃならないぞ！」
「止めの１撃！はあああああああああっっ！」
ここだ、突っ込んできたところを懐にもぐってカウンター！
「心臓ダイレクトォォォォ！」
「かはっ・・・！」
思ったとおりだ。突っ込む時には防衛本能が働かないから、地獄の武器は発動しない。でもこれって、谷間に入れたんだよな？ボクは女の谷間に拳を入れちゃったんだよな？
「うおお、鍵鍵！早く戻らなきゃ。」
ボクはホープのところへ戻った。
「連れてきましたよ、この女でしょ？」
「はは、どうもどうも。これでアナタは用済みです。」

後ろを振り向く間もなく、ボクは気絶させられた。

記録3　地獄の武器を持ってるヤツ（後書き）

今回もしますよ、地獄の豆知識コーナー！今回は地獄の「十王」についての豆知識です！地獄には十人の王がいます。秦広王＜不動明王＞、初江王＜釈迦如来＞をはじめ、宋帝王＜文殊菩薩＞、閻魔王＜地蔵菩薩＞、変成王＜弥勒菩薩＞、泰山王＜薬師如来＞、平等王＜観音菩薩＞、都市王＜勢至菩薩＞、五道転輪王＜阿弥陀如来＞、五官王＜普賢菩薩＞です。地獄の王と聞いて恐いというイメージがありますが、その正体は菩薩様や如来様です。本当は死者を救うために地獄の七回の裁判をしてるんですよ～。

記録４　人を平気で騙すヤツ

ボクはどうしたんだ？気絶させられて、それから・・・。ここは何かの中みたいだ。
「閉じ込められたのか？ドーム状の、この何かの中に」
窓みたいな部分から外が見える。外には、見覚えのある顔がある。
ホープ？
「ははっ、アナタ方は今霊魂完生装置に入っています」
「えっ、マジ・・・ですか！？」
って事は、ボクは第二の人生を送る事ができるのか。案外早かったな。でも、アナタ方って・・・。
「うおぉ！？三国！」
「あぁ！キミは・・・！」
ボクらはしばらく目を合わせられなかった。しばらくして、彼女の方から話し出した。
「この形、獄中転送装置の中みたいだね。」
「は？これって霊魂完生装置じゃないのか？」
どうなってる？ホープと三国の言ってる事が全く違うぞ。どっちかが、嘘をついてるのか？
「下がってて、これをぶち破るから！」
「こんな所で武器を使うなよ！」
何の合図もなく、地獄の武器（しょうけつがん）を使うなんてイカレてるよおい。これでボクも死者の仲間入り、僅かな希望をもがれて死ぬんだな・・・。
「ぬうっ！地獄の武器を使いこなせるようになっているとは！」
「ん？生きてる？・・・おお、助かったぁ～。」
とりあえず生きてるから安心した。でも装置がお陀仏だよ、うん。
「はははははは！装置をぶっ壊すなんて味な事してくれますねぇ！あと少しで地獄へ送る事ができたのに、ホント残念ですよぉ！」
「じゃあ、嘘ついてたのはアンタかよ・・・！」

信じらんねぇ、あんな優しい顔してた人がボクを騙して地獄へ落とそうとしたなんて！
「あの人、いやあの悪魔は前にワタシを地獄に落とそうとしたの」
悪魔、悪魔ってあの悪魔？うっそ・・・、モノホンすかい！
「改めて名乗っておきましょう！ワタシは悪魔番号１３、ホープ・ディスライク！数多くの悪魔の中で１３番目に強い個体です！」
「１３番目・・・？強すぎる」
え？１３番目に強いってそんなすごいことなの！？三国、オマエ何で悪魔の事知ってるんだ？
「ワタシこの世に戻った後、悪魔のことを結構調べたの。悪魔は地獄で刑期を終えて、生命（いのち）に執着した人間の精神（こころ）の成れの果てで、人間の精神を地獄へ落とすのが唯一の生きがいっていう下劣な生き物よ！」
下劣って元人間にそれはないと思うけど・・・。毒舌っすね、三国さん。
「前にみたいに逃がしはしませんよ！縛炎（ソルディエヌ）、発動！」
縛炎と叫んだ途端、ボクらは炎の縄に囲まれてしまった。何だ、この尋常じゃない熱さ！三国も苦しそうだ、息が苦しい・・・！
「炎で見えない、この拳が使えない・・・」
三国は意識がもうろうとしていた。ボクはまだ意識がハッキリしている。でも、武器を持ってないボクに悪魔を倒す力なんてないし・・・。早く終わって欲しい、こんな悪夢ボクは望んでない・・・。
ガチャッ――――ドンッ！
銃声？どこから・・・？それはボクの手にあった。
「ゴぉア・・・！ソのジゅウは、カのシんコうオうノほウぐ・・・。邪冥口（じゃみょうこう）！」
あれ？ボクも地獄の武器を生まれながらに持った、特別な人間って事だよな・・・？
「くっ、縛炎解除（ブローク）！」
ホープはボクの銃に恐れをなしたのか、その場から消えた。炎も一

瞬で消えた。そうだ、三国は！？
「キミも武器を・・・。名前聞いてなかったね、ワタシの名前はあの悪魔から聞いたと思うけど」
「ボクは波沢進太。三国・・・さん、よろしく」
「咲羅でいいよ、進太」
ボクと咲羅の距離は縮まったの、かな？

記録４　人を平気で騙すヤツ（後書き）

さて、今回は「悪魔」についての豆知識といきましょう！
悪魔とはいろんな宗教に見られる、煩悩や悪、邪心を象徴する超自然的な存在です。有名どころはソロモン７２柱でしょう。アブラハムでは神とその使い以外の超越的な存在すべてを指し、それの影響か魔女狩りのような残酷な蛮行が行われていたといいます。あと余談ですが、この作中に登場する悪魔たちの設定は完全にオリジナルなので、ちゃんと悪魔について知りたいのならＷｉｋｉｐｅｄｉａを活用してください。

小話1　13と6

ワタシは負けたのか・・・。13番目に強い個体であるワタシが、あんな小僧共に！

「ホープ、貴殿は敗北して消滅したと聞いたのだが」

「シャジャーですか、そんなデマあるはずないでしょう・・・」

ワタシの目の前の悪魔はシャジャー・スタンピード、悪魔の中で6番目に強い個体だ。恐らくワタシが消滅したというデマを流したのは、ベデ・テペでしょうね。アイツは嘘に現実味を与える能力を持った嘘つきですからね。

「霧隠百舌鳥（ガディオームッタ）にまた引っかかってしまったよ、なははは！」

引っかかる気なんてサラサラないのに、ぬけぬけとこの悪魔は！引っかかるということは、それが本当であってほしいと望んでいるからだろうが・・・！

「バギュウェ、フォヴィ！出てきなさい、仕事ですよ」

「「はい、その仕事必ずや成功させましょう」」

今度こそ、あの小僧共を地獄に送ってワタシ以上の苦しみを味あわせてやる！

小話1　13と6（後書き）

初の割り込み投稿、恐いです不安ですビクビクです・・・。

記録5　三途の川に居座るヤツ

ボクらはあの悪魔を倒した後、この世とあの世の境みたいな場所を彷徨っていた。三途の川でも見えるかな？って、見えちゃ駄目だよそれ。咲羅も同じ事を考えてるみたい。

「三途の川、三途の川。もしあるなら見てみたいな♪」

ボクの完全なる勘違いでした。三途の川が見たいとは、女の子の思考はわかりにくい。瑞穂も変わった思考回路の持ち主だったな・・・、ボクが好きになってボクが殺った人。

「川だよ・・・、川だよ進太！」

「まさか、本当に・・・」

三途の川があるのか、さすがこの世とあの世の境目。確か川は、船で渡るんじゃなかったっけ？

「隠れて、誰かが追いかけられてる！」

「んぐぐぉ」

ボクは強引に咲羅に連れられて、近くの茂みに入った。隙間から覗くと、中年のおっさんが鬼の形相をした老人に衣服を剥ぎ取られている。逆の方向を見ると今度は、ゴージャスな姿をしたおばさんがこれまた鬼の形相をした老婆がその衣服を剥ぎ取っている。そしてその衣服が、古い木にかけられた。

「おうおう、枝がかなり垂れとる。オマエは自力で渡れ」

「いやあぁっ！」

ザバーン――――

あのおばさん、問答無用で川に落とされちまった。もしかして、あの枝に服をかけて罪の重さなんかを計っているのか？だとしたら、ボクの場合はと思うとゾッとする。

「あれあれ、枝があんまり垂れてないよ。船に乗りな」

「おお！有り難う御座います」

おっさんは船に乗せてもらえるみたいだ。たぶん小っこい木造船だ

ろ・・・、え！？
（宝船だとぉおおおおおおおお！！？）
あれは間違いない、宝船！あんな豪華な船におっさん一人乗せる気か！船に乗りたいというボクの衝動が、無意識に体を動かした。が、咲羅がそれを止めた。
「待って、あの老夫婦はただ者じゃない。今行ったら身包み全部剥ぎ取られるよ」
ボクの足は硬直した。そして宝船は出発してしまった。おっさん羨ましい・・・。とりあえず、あの木をへし折りたい。
「咲羅、あの木をへし折れ」
「オッケー」
咲羅はボクの要望にアッサリＯＫしてくれた。よほど身包みを剥がされたくないんだな。女の子だし。
「てやあぁぁ！」
バキャァ－－－－－
殺血厳つきの蹴りはいとも簡単に、あの木をへし折ってしまった。
これで川に入らなくて済む。だが、ボクらが安堵しているところにあの生き物が現れた。
「波沢進太、三国咲羅！ホープ様の命により、貴様らの精神（こころ）を地獄へ送ってやる！覚悟しろ！」
「地獄へ落ちろ！」
悪魔は2体いる。1体だけで死にかけたのに、それが2体もいるなんて○○○○した！
「オレは悪魔番号２１６、バキュウェ！」
「アタシは悪魔番号２１７、フォヴィ！」

記録5　三途の川に居座るヤツ（後書き）

う～ん、今回は「三途の川」についての豆知識。地獄の一歩手前の場所なのは、想像がつくと思います。ほとりでは、懸衣翁＜けんえおう＞と奪衣婆＜だつえば＞という老夫婦が亡者の衣服を剥ぎ取って衣領樹＜えりょうじゅ＞の枝にかけて、生前の罪の重さを計ります。枝が垂れるほど罪が重かった事を証明し、川を自力で渡らさせられてしまいます。当然その先には地獄が待っているというわけです。この二人の老夫婦はこの話でも登場しましたよ。

記録６　友達の不幸を気にしないヤツ（前書き）

縦書きを意識したので、横だと読みづらいかも・・・。

記録6　友達の不幸を気にしないヤツ

ボクは正直恐い。自分が死んで、あの世に来て、幽霊や悪魔に遭遇して、悪魔と戦って・・・。普通の人間には体験しようが無い事ばっかりだ、死者は別として。今まで死んだ人達も、この経験を乗り越えて生まれ変わったりしたんだろう。ボクは地獄へ行くに相応しい男、どうせなら1番辛い地獄に落ちたい。でも、咲羅は親孝行なヤツだから人に生まれ変われるはずさ。さて、悪魔が2体もいる状況だ。乗り越えるにはやはり、地獄の武器しかない。

「くたばれ！下衆が！」

「下衆はオマエらだよ」

ボクはあの銃を使った。初めて悪魔を倒した、あの銃を。

ズダダァン――――――――

「ぐわぁぁぁ！」

「あああぁん！」

邪冥口の銃弾が悪魔たちの顔面を貫通した。だが、さすがに悪魔といったところか。銃弾を顔にくらってなお、こっちに向かってくる。

「飛び蹴りぃ！」

「ぬぉぉぉ！」

悪魔の1体が、咲羅の蹴りにぶっ飛ばされた。すると、悪魔の顔がひび割れて砕けて別の顔が現れた。その顔を見た途端、ボクの体内時計が止まる。

「なんでだよ、オマエが出てくるパターンじゃないだろ？悪魔の中になんでボクが知ってる顔がい　るんだよ！？答えろよ、高貴！」

悪魔の正体、それは自分の罪かもしれない。だって、ボクが殺った人が目の前で立ちはだかってるんだから。これからボクは、これからも続くであろう悪魔との戦いで、1，2を争うくらいの激闘をるんだと予感した。

「邪魔する気なら、また殺るまでさ・・・。あの時とは違う、今は躊躇いなんて微塵もないぞ」
「また殺るって、まさか進太・・・」
少し喋り過ぎたか、咲羅はボクが生前何をしたか気付いたらしい。
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーー　高貴はボクの古い友達だった。いろんな事の好みが一緒だったし、何より話のわかるヤツだった。だが去年の暮れ辺りから、ボクらの仲が急に悪くなった。原因はアイの勘違い。高貴の初出場したサッカーの試合を乱闘起こして、試合を不戦敗にさせたヤツをボクと勘違いしたのだ。その時ボクはゲーセンに行ってて、試合会場には行ってない。
「だからゲーセン行ってたんだ、カードの表記見ろよ」
「・・・くっ、じゃあ誰だってんだよ？」
高貴はごめんと言ったが、心の中ではボクが犯人と決め付けてる。徐々にボクらの距離は離れていった。そして、ボクはあの事件を起こす。
「あの時の恨みだ、オマエの彼女を奪ってやる。瑞穂のヤツ、オレの家族の財力のすごさ聞いて　　すぐオレに鞍替えしてくれたよ。いい気味だなぁ、乱闘王」
その言葉でボクは我を失い、三人を殺して自殺した。
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーー　いくらサッカー部とはいえ、実戦向きじゃない。今まで乱闘ばっかしてきたボクより弱い。今度は嫌な過去ごと消してやる。もう1体の悪魔は恐らく瑞穂だ。同時に死んだからな。
「いくぞ、高貴。ボクの本当の力を思い知って、煙のように消え失せろ」
「・・・ふん、悪魔になったオレに勝てるかよ」

ボクと高貴の戦いが始まった。ボクの銃の腕前は中々のモノだと思うが、高貴の体術も見事なモノだ。銃弾がことごとくかわされる。かといって、連射ができる銃でもない。古いタイプだし。

「オマエそんな喧嘩強かったのか！」

「そっちこそ、銃の扱い慣れてるな」

ボクらは言葉で語るより、拳で語る友達タイプらしい。男の定番だ。

バキィイィッーーーー

「桁外れすぎる・・・、悪魔になった影響か」

高貴の蹴りがボクの脇腹を、華麗に鮮やかに直撃した。

「あれからどれだけ、生き返りたいと願ったか。オマエに殺されて三途の川彷徨って、天国にも　行けずじまいだったんだぞ！瑞穂もだ！そんな時、悪魔ホープ様が現れた！オレ達に、復讐のチャンスを与えてくれたんだ！」

ゴキャッーーーーー

「ぐはっ！」

高貴の鉄拳をモロにくらった。やばい、意識が遠のいていく・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー　「おい、起きんかい小僧！ったく、この不動明王の宝具を2度も許可なく使いよってからに！」

「不動、明王？」

目を覚ますと、目の前に炎を身に纏った大きな巨人が立っていた。

地獄に来たのか？

「本来なら無間地獄（むけんじごく）へ叩き落される重罪やで！」

やっぱり来たのか、地獄に。でも地獄にしては、明るい。否、明るすぎる。

「あの、どうすればよろしいのでしょうか？不動明王様」

さすがに神様だから、無意識に敬語になる。

「悪魔に地獄へ連れてかれるのも癪に障るでな、さっさと悪魔倒して、川渡って来いや！」

「うわっ」
気が付くと川に戻っていた。
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――
高貴はボクの起こった出来事に全く気付いていなかった。
「邪冥口、連射モード！」
ドドオッドオドッドドドドドドド―――――――――――――
「かぁっ・・・・、連射でき・・・たのか・・」
ボクの友達は本当に煙になって消えた。

記録６　友達の不幸を気にしないヤツ（後書き）

今回は不動明王についてのお話。不動尊と呼ばれ、多くの人に親しまれてますね。
人の煩悩やら欲望を燃やしてくれる（？）、五大明王のリーダーです。
伝承では、大自在天の業を阻止した大王として伝えられています。
ちなみに地獄の秦広王とはこの明王様です。ＢＬＥＡＣＨの明王はデカすぎる。
試しに読んだら、かなり見辛かったので次から元に戻そうと思いますｗｗ

小話2　上階悪魔会議

ワタシは今、上階悪魔会議に参加している。上階というのは、悪魔番号が５０より少ない悪魔たちの事だ。ワタシは比較的発言力を持つ方だが、１２番以上の悪魔には遠く及ばない。

「ホープ様、今回の定義についての結論を。皆様は早急に対処すべきと仰っています」

「そうですか、すみませんヒュード」

ワタシの隣には悪魔番号２１、ヒュード・ミリギャーブがいる。冷静で品がある、上階の悪魔には稀なタイプの悪魔である。

「１３番ホープ・ディスライクの結論は、対応策として１００番台の悪魔たちを向かわせるべきではない　かと考えます」

といっても、最終結論を下すのは１番のユーピノン・ヴァサワムダ様ですが。少しは結論に汲んでいただきたいものですね。

「最終結論、悪魔番号３４ベデ・テペに向かわせ地獄へ送る」

「イヤッハ～！お任せください、ユーピノン様。霧隠百舌鳥のベデ・テペ、必ずや任務を全うしましょ　　う！」

なにぃ！？ベデに小僧共を消させる気か！でも、アイツらが消えるのならこの程度の屈辱は耐えられる。下手に番号を下げたくない・・・。

小話2　上階悪魔会議（後書き）

言い忘れてたんで言っておきますが、「小話」の方は悪魔側の視点を書いてます。

記録7　嘘に翻弄されるヤツ（前書き）

豆知識がなんか尽きてきた・・・。まったく浮かばない・・・・。誰か教えてください。活動報告でちゃんと募集しないと・・・・。

記録７　嘘に翻弄されるヤツ

ボクが高貴を倒したと同時に、咲羅ももう１体の悪魔を倒していた。その正体はやはり瑞穂だった。事が済んで、咲羅があの事を聞いてきた。別に減るもんじゃないし、話してやるか。

ーー

パンッーーーーー

咲羅はボクの話に怒りを覚えたのか、思い切り平手ではたいてきた。そのはたいた跡の赤みは、彼女の怒りの激しさを表していた。

「調子に乗ってんじゃないわよ！自分だけ都合よくいこうって腹だったなんて。地獄にとっとと落ちなさいよ、自己中！」

自分で言うのはいいのに、他人から言われると相当腹が立つ。地獄に落ちろなんて、今の状況じゃ冗談に聞こえない。

「ふん、ボクは諦めないからな！生き返って第２の人生を送るんだ！」

ボクは川に飛び込み、ただ前へ泳いだ。咲羅は船がいた場所へ戻っていった。

ーーーーーーーーーーーーーーー

川を泳ぎ続けて半日くらい経っているのに、岸が見えない。しかし、腹は全く減らない。死んで内臓が退化しちゃったのか？デスノートの死神か・・・。いや、進化っつってたなマンガで。

「ヒャハ、野郎から終止符(ピリオド)を眺めてやる」

ボクは僅かながらに後ろに気配を感じた。が、三途の川を渡っている者などいるわけがない。あの老夫婦に服を剥ぎ取られたさっきのおばさんの姿も当然ない。全裸で川を渡ったのか・・・、熟女の裸ほど反吐がでるものはこの世に無い。すると、辺りが霧に包まれた。

「霧隠百舌鳥発動(ガディオームッタ)」

ーーーーーーーー

霧が晴れると、そこには見慣れた景色がある。ボクが生まれ育った都市(まち)だ。平和主義をほざくヤツばっかのボケボケの都市、そしてボクを真っ向から否定した都市だ。

「何だよ、悪魔の力か？動揺でも誘う気？」

「ってーな、ボーッとしてんじゃねーよ」

え？今、当たったの？振り向くと、消えたはずの顔がいる。高貴がボクの真後ろにいるのだ。

「ふはっ、今回は下手糞のまやかし使いみてーじゃん！」

ボクは銃を取ろうとしたが、その手に銃はなかった。

「うっそ、今まで普通に出たのに」

「何ワケわかんねー事言ってんだ？」

ボクは邪冥口の弱点を知らなかった。不動明王は銃に関する事をあまり言わないで、悪魔と戦わせたからだ。

「その銃の弱点、それは自分の撃ちたいモノが視界に入らないと発動しない事。この場合は悪魔、つまりオイラを撃ちたいモノと認識している。が、そのオイラが野郎の視界に入らなければ問題ない」

どうやら今回の悪魔は銃の弱点を知っているようだ。見つけたら吐かせてやる。

「こんのヤロー！」

ドガァーーー

「ぶっ・・・」

ボクは高貴の顔面を殴った。すると顔が潰れ、血飛沫があがった。

周りには他の人がいる。

「殺しだあっ！」「警察を呼びましょ・・・」「おい、携帯持ってるか？」

あぁ、前の状況の数倍悪くなってきた。だが、これは嘘なんだ。どんだけ壊そうと現実になんら支障は無い。ボクは無意味な暴挙に打って出た。

「うらぁあああ！邪魔なんだよぉ！」

ボクは殴る蹴るを周りの人に浴びせた。わずか1分で、１０人くらい殺った気がする。悪魔はボクに何をさせたいんだ？
「警察だ、待てぇえ！」
警察のその手には、安全装置を外した銃が握られている。射殺命令が出てるってか？
「ヒャハハ、オイラの力は相手の望む事に合わせた嘘をつくる。野郎が心で苦しみを他人に押し付ける事を望む限り、永遠に嘘は続くのさ」
関係ない、ボクは死んでる。すでに死んだヤツを、法は、裁けない！
「ふふふふ、楽しい～～～～！！！」
「ぐぅうぉ・・・」
ボクは警官一人を殴り殺して、銃と銃弾を奪い取った。
「ＦＯＯＯＯＯ！苦しめ苦しめ、バカが」
銃声はまるでタップダンス、フラメンコのようなリズムで響いた。これは気持ちいい、生きてたときには感じられなかった快感だ。
「ふぅ、もういないな？」
外を出てしばらく歩いた。驚くほど人がいない、ボク一人が取り残されている。不愉快だ。
「まだ誰かに押し付けたい？」
「・・・！」
瑞穂まで出てくるのか、リアルな嘘だな。
「アンタ自分でわかってないの？心の底から望んでいる事」
「あ？そんなの決まってるさ」
早くこの嘘から抜けるんだよ、そんで地獄でちゃんと裁きを受けるんだよ。できるなら生き返りたい。
「バッカね～、アンタは今までのイミフなモヤモヤを消したいだけなの！自分の快楽が欲しくて欲しくてしょうがない、精神年齢５歳以下のクソ野郎なんだから」
「ふん、前みたいにされたいか」
ボクの心にモヤモヤが生まれた。もう誰かにぶつけたい、ぶつけて

スッキリするんだ。
「じゃ、撃ちなさい。その凶器で過去のモヤモヤと共に、アタシを殺っちゃって」
「何言ってんだ、オマエ・・・・」
自分から撃てって言うヤツがいるかよ・・・。命ってのがどれほど大事かわかってんのか？こんな事を思っていたら胸が急に、苦しく、なってきやがった・・・・・。
「うぉあ、何だこれ・・・？胸が締められてるこの感じは・・・・」
「アンタ人の事言えないでしょ？自分で死を選んだクセに」
ドクン！ーーーーーーー
ヤバイ、これは・・・ヤッバイ・・・。胸が苦しい、これがボクの心のモヤモヤか・・・。
「さてと、終止符がやって参りました。この嘘から唯一逃れる方法、それは自らの手で終止符を打つ事さ。自分の首を掻き切って終わらせるのさ」
まずい、考えるな。自分で終わらせるなんて、考えるな！
「くぁ、考えなければそれが確信になっていく・・・。・・・！」
そうだ、考えてる事を変えればいいんだ。今は、この苦しみに向き合いたい！
「いっ！？オイラの嘘の世界が、崩れている！？まさか、望みを変えたのかよ・・・」
やっぱり、考えてる事を変えるとこの嘘はバランスが崩れていくみたいだ。
「ぬぃぃぃ、別の嘘を造るには最低1分必要なのに・・・！」
ボクが空を見上げると、1匹の百舌鳥が飛んでいた。さっきまでこんな鳥はいなかったぞ。この百舌鳥はもしかして、悪魔？
ダァァアンーーーーー
「がぁあ！オイラが悪魔だって、なんで・・・」
その百舌鳥は煙になった。という事は、悪魔だったのか。それと同時に、また霧が出てきた。

――――――――――――――――――――

霧が晴れると、ボクは船らしきモノの上にいた。目の前には咲羅が立っていた。

「お疲れ、悪魔を倒したんだね」

「え、なんで知ってるんだ？それにこの船、どうやって？」

ボクは宝船に乗っているのだ。咲羅は運転していないし、誰が動かしてる？

「オホ、起きよったな」

舵を持った背の高い男がこっちを見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0751n/

一度死んだヤツと二度生きたヤツ

2010年10月10日19時32分発行